



夫に勧められ、『流れる星は生きている』(中公文庫)を読みました。私は著者の藤原てい(1918-2016)を雑誌の対談等を読んで、その名を知っていました。彼女の物言いには「歯に衣着せぬ」があり、何ものも恐れない強さを感じさせられていました。この本は 77 年前の満州からの彼女の引揚体験の手記です。壮絶さに息もつけないほどで、一気に読み終えました。

1945 年 8 月 9 日、旧満州の首都・新京(長春)の観象台に勤務していた彼女の夫が夜遅く呼び出され、帰って来るなり、「新京に戦禍が及びそうである。関東軍の家族がすでに移動をしている。観象台の職員、家族にも、汽車の割り当てがあり、新京からすぐに逃げるから、あと 30 分で官舎から出る」

とのことでした。日頃から彼女は非常持ち出しのトランクに家族の衣類、非常食の準備をしていましたが、6 歳の長男、3 歳の次男、生後一か月の長女がいます。彼らに着せるだけ着せて手を引き、負い、両手に持てるだけの荷物を持って、真夜中の道を駅に急ぎました。道中、ひっきりなしに通るトラックの上には軍の家族と荷物が満載されているのを見た、と言います。ソ連参戦の情報を得て、関東軍は誰よりも先に荷物を持って逃げ出したこと、政府関係者には避難の指示があり、割り当てがいち早く用意されていたことが分かりました。それにつけても火急の事です。

観象台の疎開団は約 50 名でしたが、数人の男性職員は職場に戻ると言います。彼女の夫もその一人で、彼女だけが、幼い三人の子どもを連れて、荷物を抱えて、無蓋貨車に乗り込みました。貨車は 8 月 10 日 10 時に新京を出発し、所々で停車しながら、2 日間南下し、国境の鴨緑江の鉄橋を渡り、北朝鮮に入り、終点の宣川(近代には朝鮮におけるキリスト教の中心地のひとつ)に、8 月 12 日に迎えられました。

疎開団は 300 名ばかりのほかの避難民と共に、宣川の農学校に収容されました。炊事場を作り、一日 2 回大豆と白米の握り飯が配給されました。8 月 15 日に「戦争が終わった」と伝えられました。それは「日本が負けた。ともかく逃げなければ」という恐怖と緊張を意味しました。外では朝鮮人の旗行列が通り、町中が賑やかになりましたが、彼女たちは外出が禁止となり、不安のまま日々が過ぎて行きました。8 月 18 日夜遅く、観象台の男性職員 8 名が疎開団に戻ります。彼女は家族だけでもすぐに南下したいと夫に訴えました。夫は疎開団としてまとまって行動すべきだと主張し、疎開団の人々も動くほうが危険だし、ひと月ほどで優先的に帰国させてもらえる信じ、なかなか意見の一致を見ません。やっと決断し、出発準備をしているさなか、時すでに遅く「今日から汽車は平壤以南へは行かない」という連絡を受けました。その日は 8 月 24 日と彼女は推測しています。

観象台疎開団は町はずれの一軒家に移動を命じられ、集団生活は楽になりましたが、経済的に難しくなってきました。あちこちに泥棒が出没。日本紙幣は全く通用せず、男たちは労働使役に出なければなりません。南下する情報を待ちつつ過ごしていたものの、10 月 28 日に、「18 歳以上 45 歳までの日本男子全員は平壤に」との命令を受け、男性たちが連れ去られ、残ったのは、年寄りの男性一人と女子供の 39 名でした。力が逆転した朝鮮人におびえ、食糧に困窮し、仲間同士でも疑心暗鬼になり、精神的にも追い詰められながら、寒い冬を越しました。その頃、ひとりの保安隊員の朝鮮人が子どもたちのために飴を持って、しばしば、訪ねて来てくれました。彼は美しい声で歌を歌ってくれました。この歌を彼女は覚えて、無事に国に帰りつくまで、心の中で歌い続けました。

♪ わたしの胸に生きている あなたの行った北の空 ご覧なさいね 今晩も
泣いて送ったあの空に 流れる星は生きている

彼女は行商をし、多少のお金を得ます。疎開団の副団長に選ばれ、日本人会本部との交渉、保安隊との折衝、配給などに当たり、何とか団体として生きる道を探しましたが、身軽な人は離脱して行きました。避難生活は一年になろうとしていました。

最後に残った 18 人は日本人会本部の反対を押し切って、どうせ死ぬならどこでも同じと決め、8 月 1 日に平壤までの汽車に乗り、3 日に新幕まで進みました。そこから、徒歩で進むことになりました。「わたしは右手に正彦(次男)を抱きかかえ、左手に正広(長男)の手を持って、咲子(長女)を背にリュックを首にぶら下げて人の群れの後を追った」と記しています。殆どの荷物は捨てて、38 度線まで逃げるんだ、と決死の逃避行が始まったのです。ここから、頼る者のない母子の 7 日に渡る道行です。

暗闇のなか、風雨にさらされ、赤土の泥にまみれて坂を上った夜。切り立った崖下の山影の泥道を凍死寸前の次男を抱いて歩く。牛車に子どもたちを乗せて小雨の中を歩き続ける。真夏の太陽のカンカン照りの野道を進み、休むことなく南下し続ける。夜に出発すると激しい夕立で、牛車は動かない。靴もなく買った草鞋も切れ、裸足で進む。牛車に子どもを乗せ、大きな川を渡ります。野宿しながら、山をいくつも越える。牛車に支払うお金が尽きます。大きな山を迂回して、石ころだらけの山道を



裸足で歩きます。峠を下ると、広い川が行く手を遮っていました。彼女は最初に長女を向こう岸へ、戻っては次男、三度目に長男を負ぶって、この川を渡り切りました。その後下流まで川岸を歩いて進み、とうとう畑に倒れ込みました。

10日、彼女は再び行進の一番後について進み、38 度線の緩衝地帯に入りました。月も星もない今にも雨の降りそうな夜道を進むと大河のほとりに出ました。もう一歩も進めない。「おーい！ 助けて下さい！」と何度も絶叫しました。向こう岸から声が聞こえて保安隊が駆け付け、「すぐそこが橋だ」と言って、子どもたちを負い、彼女の手を引き、橋を渡りました。「あの山の下に開城がある。すぐだよ。しっかりしろ！」と言う保安隊員に励まされます。山の麓のいたるところでは、日本人の「もうすぐだ！ 頑張れ！ やい！」という絶叫で満ちていました。眼の下に広がる開城の電灯に、とめどなく涙が流れ、そこへ、転がり込むように進んで行き、広い道に倒れこんでしまいました。気が付くとアメリカ軍のトラックに救助され、避難民収容所に到着していました。11 日から開城の収容所で 5 日間ほど過し、議政府の収容所へ移されました。ここでさらに 4、5 日過し、貨車で釜山に向かいました。その時には、手持ちのお金は 20 円(ゆんご 5 個 10 円)だけでした。

8 月 27 日に釜山港を出港、翌朝、博多港に入りましたが、船は停泊し続け、9 月 12 日にやっと上陸しました。一人 1,000 円まで日本銀行券に替えられる。所持金 100 円以下の人には一人 100 円を旅費として支給する。引揚証明書を交付され、毛布、子供服、下駄、乾パン、外食券を配給されました。

博多から上諏訪へ。そこが父母が待っている故郷の町でした。故郷の駅に降り立ち、「引揚者休憩所」と木札がかかった待合室に入った時、「諏訪の湯」と書いてある大きな鏡に写った自分の姿。灰色のぼうぼうの髪、青黒く土色に煙った顔、飛び出た頬骨、奥に引っ込んだ目。色の褪せたシャツ、膝小僧のあたりが破れた半ズボン、水ぶくれに腫れあがった足に下駄。背中には死んだような子を背負い、がくりと前に倒れそうな子どもたちを両手に引いて、立っていました。幽霊そのままの姿でした。「もういいんだ、もういいんだ」とつぶやきながら、眼の前が薄らいでいきました。夫にどこかで逢えるかもしれないと感じながら。

中国で利権を得ようとした日本。その政策に乗り、貧しい日本人が活路を求めて、満州に渡りました。しかし、国際法上許されないことでした。責任者は彼らを放置して、逃げました。庶民の引揚は悲惨で残酷でした。誰もが命懸けです。自分さえ良ければという人、弱い人を邪魔にする人、弱い人に付け入る人もいました。彼女は 3 人の幼い子連れの弱い、助けが必要な母でしたが、過酷で、非情な、壮絶な体験をせざるを得ませんでした。彼女は負けてはいない気丈な女性です。それ以上に、彼女は子どもを守る愛と気迫に生きていました。このようなことは二度とあってはならないと誰もが思いながらも、いまだに戦争があちこちで行われ、失われている命があるのはやり切れない思いです。